

〔発表申込書〕 【注意】こちらは洗練の余地のあるアブストラクトです

タイトル	ソフトウェア開発組織におけるプロセス改善活動
申込区分	(該当する項目を残してください)
カテゴリ	(該当する項目を残してください)

キーワード (数個)
ソフトウェア開発 プロセス改善

【アブストラクト記入用紙】 **【注意】こちらは洗練の余地のあるアブストラクトです**

※アブストラクト執筆に際しての注意事項

- ①図表を含め、A4 サイズ 2 枚程度を目安におまとめください。
- ②万が一、上記容量をオーバーする場合はページを追加ください。

1. ねらい

今回紹介する方法で、解決しようとする問題あるいは研究・開発の目標・目的について記してください。

ソフトウェア開発組織において、プロセス改善活動を根付かせることは困難である。組織的に取り組むべき活動である一方で、開発において効果が実感できなければ、人的リソースと時間をかけて取り組むモチベーションは上がらない。プロセスを改善することが、良いプロダクト（品質）を生み出すことにつながるのではないかということは、これまでも多く言われてきた。プロセスを改善するためには、評価が必要である。また、第三者が開発組織を評価する際にも、CMMI などのプロセス成熟度評価の結果は参考になる。本稿では、ソフトウェア開発組織が、プロセス改善活動を根付かせるために、どのような工夫ができるのかについて、現状を分析し、取り組んだ内容について報告する。

2. 実施概要

実施方法について工夫した点がわかるように概説してください。

1 で述べられた問題点を改善できることが分かるように記してください。

プロセス改善が組織で根付かない原因にはいくつか考えられる。筆者の所属する組織では、次の原因が社内で指摘されていた。そもそも、プロセス改善活動を行う意義や、当事者意識がプロジェクトメンバにない。プロジェクトメンバとしては、協力してもしなくても結果が同じだと感じられる。いくら効果があると言われても、定量的に示されないのので、説得力がない。プロジェクトに課題はあるが、プロセスに原因があるのかどうか定かでない。アジャイルを取り入れた開発が必要になるプロジェクトも増えてきて、標準プロセスは使えない。といった原因である。今回、これらの問題を解決するために、SEPG と現場からメンバを召集してチームを組み、現状の分析と解決策の立案に取り組んだ。特に工夫した点は、それまでに SEPG と現場の技術者は業務上協力することはあっても、チームに参加し、特定の目的をもって集中して取り組むことはなかった。これを実現したところが、本取り組みの工夫した点であり、特徴である。同じチームで取り組むことによって、現場での悩みを実際に聞くことができ、プロジェクトや部門毎に異なる「困難さ」を持っていることがわかった。今後の SEPG からのプロジェクト支援に活かせると思う。

問題点を改善できるかどうかについては、解決策の内容に関係する。チームから提示した解決策は、次の通りである。プロジェクトは計測されていてデータはあるが、十分に活用されていないので、SEPG と現場が協力してデータを分析することによって、効果が検証できるのではないかと。プロジェクト途中で可視化できるツールを導入することによって、現場の意識が変わるのではないかと。対象プロジェクトを複数選び、標準プロセスの見直しに力を入れて取り組む。といった解決策である。これらを実施することで、上述した問題に対応できると考えている。解決策の実施は、概ね理解が得られていることから、できることから順に始める計画をたて、実施していく予定である。

3. 実施結果

2の実施によって得られた効果について（できるかぎり具体的に）概説してください。

今回、SEPGと現場の若手の技術者が同じチームに参加して分析作業を実施することによって、組織内に新たな視点が生まれた。SEPGと現場の技術者は業務上協力することはあっても、チームに参加し、特定の目的をもって集中して取り組むことはなかった。同じチームで取り組むことによって、現場での悩みを実際に聞くことができ、プロジェクトや部門毎に異なる「困難さ」を持っていることがわかった。今後のSEPGからのプロジェクト支援に活かせると思う。

チームから提示した解決策のうち、「プロジェクトは計測されていてデータはあるが、十分に活用されていないので、SEPGと現場が協力してデータを分析することによって、効果が検証できるのではないか」については、実施したところ効果が得られた。いくつかのプロジェクトで計測していたデータを集め、2か月半かけて分析した結果、プロセス改善活動が、プロジェクトの成功に寄与しているだろうということが、データから部分的にでも読み取れたので、今後はより現場と一体となって組織的なプロセス改善活動が行えると考えている。以上2点が得られた効果である。

4. 結論

問題解決の度合い、今後の展開への期待などを主張してください。

今回の取り組みでは、社内で指摘されていた次の点について、問題解決を図った。具体的な問題は次の通りである。そもそも、プロセス改善活動を行う意義や、当事者意識がプロジェクトメンバにない。プロジェクトメンバとしては、協力してもしなくても結果が同じだと感じられる。いくら効果があると言われても、定量的に示されないので、説得力がない。プロジェクトに課題はあるが、プロセスに原因があるのかどうか定かでない。アジャイルを取り入れた開発が必要になるプロジェクトも増えてきて、標準プロセスは使えない。今回の取り組みを実施した結果、最後の項目以外については、少なからず解決の糸口を見つけたことができたのではないと思う。

今後の展開と期待については、解決策はまだ1項目しか実施していないので、残りの2項目について今後実施していく予定である。今回取り組んで得られた結果を活かし、これらを踏まえて実施してゆけば、指摘されている問題のすべてに有効な結果が得られるのではないかと期待している。プロセス改善活動には終わりはなく、継続することが重要なので、今後もSEPGと現場と品質保証部門が一体となって活動していく予定である。

【注意】こちらは洗練の余地のあるアブストラクトです